

# 幼児教育における 舞踊の地位

教育（保育）という立場からすれば、すなわち保育のカリキュラムをつくるというような教育技術の面からみれば、幼児をその対象とした場合、文学と美術と音楽と舞踊をそれぞれ独立した科目としてとりあつかうことのできないことは誰でも知っています。サブジェクト間の区別ははっきりできないし、またははっきりさせるべきものではないと思います。

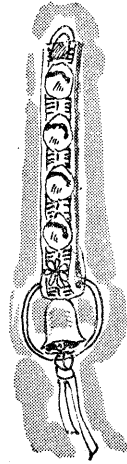
文学と美術と音楽と舞踊は幼児の「あそび」という生活の中にとけ込んで行ってしまうのでしょう。しかし幼児の生活が「あそび」であるという意味ではそれはとりもなおさずすべて広義における芸術の世界であるといえます。

幼児の生活は芸術の世界に入ったものでありますが、しかしそれは芸術をきわめて広く解釈し、実利的目的の伴う大人

の生活、またはその行為と比較した場合のことでありま  
す。したがって幼児の芸術の世界の中のあそびは芸術行為と  
いう点からみれば最も基礎的な範囲を出ないものであって、  
それはむしろ芸術的行為とよんだ方が適切かと思えます。

幼児はすべて同時に詩人であり、画家、彫刻家、建築家であり、音楽家であり、舞踊家であります。すなわち幼児は大人の世界では専門としてそれぞれ分かれているいろいろな芸術家を全部一人で兼ねているわけであります。かくの如くすべてを兼ねてはいますが、その芸術的行為においてはそれぞれの分野の区分がなく、区別のつかない部分もたくさんあります。

このようなとけ込んだ状態を総合とよぶのは全く正しいと



はいえないが、しかしまあそのようなことを意味するものとしますと、幼児の芸術的行為は総合的であるといつても差しつかえないと思います。

さらに舞踊という観点からこれを考察しますと、幼児の生活すなわちそのアクティヴィティは、ルドルフ・ラバンが説明したように、その大部分が広義の舞踊であります。人間のアクティヴィティは芸術行為と仕事、または *doing* という意味での労働行為の二つに分かれますが、今日のわれわれの社会では人間が成長して大人になるにしたがつて前者は減少し、後者が主体となります。またときには前者は0になり後者が一〇〇パーセントになる極端な場合もあります。そのために今日の先進社会ではこのことを憂え、その対策としてレジャー活動とか日曜画家の運動を起こしているところもあるくらいです。

大人から逆に幼児にもどしてこの関係をしらべますと、幼児の生活の大部分は「あそぶ」ことにあり、したがって芸術的行為でしめられています。幼児の生活には仕事をすること、すなわち労働行為はほとんどありません。ですから幼児の生活はほとんど一〇〇パーセント芸術的行為であります。幼児がだんだん成長しますと、芸術的行為は減り、労働

行為がしだいに多くなります。そして大人になるとそのパーセンテージが逆になるわけでありませう。

幼児の芸術的行為の特徴はそのすべてが運動を伴うこと、すなわち運動的であることとあります。たとえば歌をうたう場合、大人と異なつて幼児は手を振ったり体を動かします。それがもつとも自然であるわけです。ことばをかえていえば幼児のすべての芸術的行為は舞踊的であり、したがつて舞踊という観点から見ますと、幼児の芸術的行為は広義の舞踊そのものにほかなりませぬ。

そこで幼児の生活は舞踊である、と断言できます。幼児にとつては舞踊することが最上のよろこびであり、舞踊が幼児の生活であります。

保育指導の技術的面からすれば幼児の芸術的行為は総合的でありましようが、しかし舞踊が主体にならざるを得ないことは、現在観念的に舞踊または舞踊の主体性を否定している人たちも、現実には幼児に「おどる」ことから始まり「おどる」ことにおわる教育（保育）をなしていることが雄弁に証明しております。幼児の芸術的アクティヴィティは舞踊が基盤となり中軸となつて、それに音楽や美術や文学が加わつたものといえます。

しかし右のことは教育の技術的面から見たものでありまして、その教育の技術的面のものをなす学問的な面からこれを考察してみましよう。そうするにはまず舞踊と音楽と美術と文学を保育技術以前の姿、すなわち舞踊は舞踊として、音楽は音楽として、文学は文学として、美術は美術として、それぞれの芸術の本質とその特質をみきわめることが必要となります。

このことは美学の研究によって学的に究明されたことでありますが、ひと昔前の話は別として、今日では舞踊と音楽と美術と文学はそれぞれ独立した芸術であり、芸術としての共通点を持ちながらも、同時に独自の本質と特質を持っていることが明らかになっています。

しかし不可解なことには（おそらく舞踊に対する研究の不足が一つの原因になっているかもしれないが）、舞踊が音楽の一部または音楽に從属する芸術であるかのような非学問的な考え方がいまだに残っており、それがわざわざいして幼児の教育（保育）を変形的なものにしているという事実があります。

これはわが国だけでなく外国にもよくみられることです。たしかに間違っています。たとえばリズムに関しても音

楽のリズムと舞踊のリズムが同じものであるかの如く考える無知さの如きです。

そういうことは幼児教育（保育）の教師（保育？ 保父？）を養成する大学の研究科目やカリキュラム編成を見てもわかるし、それが全く間違つたままにうけつがれています。またその管理の面にまでその影響を発見できるようにです。

幼児の教育（保育）において舞踊の指導をどうするかを研究することは大切なことではありますが、それはむしろ枝葉のことであつて、もっと重要で基本的なことは管理の面でも研究の面でも、舞踊が音楽と対等な独立した芸術であること、を学問的に認識し、それを土台として新しく出発することだと思ひます。

（舞踊家）